

宮沢賢治作品のペルシャ語訳における諸課題

アスイエ・サベル・モガッダム⁽¹⁾ 鈴木 健司⁽²⁾

Various challenges in Persian translation of Miyazawa Kenji works

Asieh Saber Moghaddam⁽¹⁾, Kenji Suzuki⁽²⁾

The translation of Kenji Miyazawa tales which will be published soon in Iran, is the first translation of Kenji's fairy tales in Persian. Due to the differences in grammar and writing between Japanese and Persian, the author has tried to address some of the challenges which are on the way to a good translation of the works of Kenji Miyazawa in Persian language. Among the cases that have been investigated, one can refer to "Comparing the subject in Japanese and Persian sentences, The use of written and spoken language, Onomatopoeia and the local dialect of the Iwate province", which has been frequently used in Kanji's works.

1. 宮沢賢治の作品を翻訳する主な動機

筆者にとって、宮沢賢治の作品をペルシャ語に翻訳するには2つの大きなポイントがあった。

1) 作品の美しさと深さ

宮沢賢治の作品は読めば読むほど筆者にとって興味深いものになってくる。なぜなら、賢治は美しく意味の深い作品の形で、自然を感じることの楽しさを述べ、人間社会の持つ悲しさを癒していると言えるからだ。

才能豊かな、偉大な作家、詩人であり、さらには画家だとさえ考えている。

2) イランにおける賢治の作品の最初の紹介

今までイランでは、近現代日本の作家として芥川竜之介、川端康成、三島由紀夫、村上春樹などの作品が翻訳刊行されている。それらはみな英語訳からペルシャ語に翻訳されたものである。日本語からペルシャ語に直接翻訳された文学作品はほとんどないと言えるだろう。宮沢賢治の詩作品としては、「永訣の朝」が俵谷なほこにより、ペルシャ語に翻訳、出版された『Shoaraye Bozorge Moasere Japon』(1998)⁽³⁾という日本の近現代詩を集めた詩集の中に収録されている。また、「雨ニモマケズ」が2009年にジャーヘッドザーデにより日本現代詩を紹介した詩集『Bargi Dar Saye』⁽⁴⁾の一部でも、日本語からのペルシャ語訳が試みられている。その他、宮沢賢治の本格的な翻訳としては拙著『Mahe Asemane Sobh』(2015)⁽⁵⁾が刊行され、そこには31篇の詩が収められている。今回童話集の翻訳も刊行できれば、イランで初めての賢治の童話の紹介になる。

2. 日本語のペルシャ語訳の課題

ペルシャ語⁽⁶⁾はインド・ヨーロッパ語属に分類され、基本的には英語などのヨーロッパ語との共通性が明らかだが、以下の諸点において、異なりを見せる。

ペルシャ語では、動詞の位置が文の後ろにくる。初級段階の日本語はイラン人にとって、学びやすいと言える。また、ペルシャ語には過去完了進行形は存在しないので、英語において過去完了進行形で翻訳すべき日本語は過去進行形で対応することになる。

語頭には子音+子音と言う形は存在できない。必ず子音+母音または、

母音+子音となる。この点は日本語の音節構造に近い。

1) 主語の問題

日本語の文では主語が省略されることが多いと言われているが、ペルシャ語の場合もまた、主語のないことは珍しいことではない。このように書くと、日本語の文における主語が省略されやすいという性質が、ペルシャ語への翻訳を容易にさせるように思うかもしれない。しかし、それは大きな誤解で、ペルシャ語においては、たとえ主語がなくても、動詞語尾の変化からすぐに主語が確定される。つまり、日本語に主語がないということとペルシャ語に主語がないということは、本質的な相違であり、ペルシャ語母語話者にとって、日本語の主語の省略の問題はかなり難しい課題である。翻訳する際は、日本母語話者にかならず聞いて、確認する必要がある。

2) 終助詞「よ」「の」「ね」などの扱い

『クラムボンはわらったよ。』

دیدی کرامبون خندید؟

(Didi Crampon khandid?)

“Crambon was laughing, you know?”

『それならなぜクラムボンはわらったの。』

پس، چرا کرامبون خندید؟

(Pas chera Crambon khandid?)

“But why was he laughing, then?”

上記のように日本語の文末に来る「よ」「の」などの終助詞はペル

シャ語には存在していない。終助詞は「自分の判断を示し、相手に同意を求めたり念を押ししたりする意を表す」(広辞苑)とされる。このような言葉の意味をペルシャ語で表す場合には、通常文を発話するときのイントネーションを変更して、表現する。しかし、文章だけの場合、イントネーションで示すことができない。こういう際は「よ」の訳として、ペルシャ語動詞の「دیدي didi」(見ましたか。)、にして、翻訳をする。英語訳の場合も「よ」は「you know」で表されている(ジョン・ベスター訳参照)。文末の「の」には英語の「then」と一緒、ペルシャ語の助詞「پس -pas」を使った。

文末の「ね」はペルシャ語にない。しかし、文章の流れに合わせて、英語の「isn't it?」「is it?」と同じような働きを持つペルシャ語にしている。

「実にしづかな晩ですねえ。」(「土神と狐」)

- واقعاً شب ساکت و آرامی است. اینطور نیست؟

(Vaghean shabe saket o arami ast. Intor nist?)

“what a peacefull night, he said.

「まあ、お日さまも星のうちだったんですわね。さうして見ると空にはずみぶん沢山のお日さまが、あら、お星さまが、あらやっぱり変だわ、お日さまがあるんですね。」 「土神と狐」

- یعنی خورشید هم یک ستاره است. درست است؟ پس، خورشید های زیادی، نه، ستاره های زیادی، آه نه، درست نشد،

خورشید های زیادی در آسمان وجود دارند. اینطور نیست؟

(Yani khorshid ham yek setare ast. Dorost ast? Pas, khorshidhaye zyadi, na, setarehaye zyadi, ahh na, dorost nashod, khorshidhaye

zyadi dar aseman vojud darand. Intor nist?)

“Good heavens! So the sun is only one of the stars, is it? Then I suppose the sky must have an awful lot of suns _ no, stars _ oh, silly me, *suns*, of course.

3) ペルシャ語における美意識

ペルシャ語の歴史は、1) 古代ペルシャ語（紀元前550～330年）、2) 中期ペルシャ語、(ササン朝 (224～651))、3) 新ペルシャ語（サーマーン朝、874～1004年）に分類されている。

イラン人は現在⁽⁷⁾も1000年ぐらい前の文章や詩を読むことができる。イランの有名な詩人ルダキ（858～940）やジャラルール・ウッディン・ルーミ（1207～1273）の詩のペルシャ語は現在でもイラン人は当時のペルシャ語のまま読み、理解している。

現在のペルシャ語は昔と比べると、よりシンプルになって、昔のペルシャ語と多少の異なりがあるが、まだイランの人々は昔の詩を読んでも分かる。

ペルシャ語には「話し言葉」と「書き言葉」があるが、文章を書くときは必ず「書き言葉」が使われている。たとえ、会話の場面であっても「書き言葉」を用いるのが一般的である。日本語母語話者からすれば、理解しにくいことかもしれない。むろん例外もあり、対話を「話し言葉」で表記するSadegh Hedayat（1903～1951）のような作家もいる。

私は宮沢賢治を翻訳する場合伝統的なペルシャ語の美意識に従い、「書き言葉」を用いて、美しい翻訳を目指している。

たとえば、「龍と詩人」のような作品は深くて、豊かな意味を持っているので、私はそれをペルシャ語の「話し言葉」ではなく、文学的な「書き言葉」で翻訳した。「話し言葉」で翻訳した場合、崇高な内容で

あると判断されない可能性が高い。したがって、私も作品の登場人物に合わせて、対話には「話し言葉」か、「書き言葉」を選んで翻訳を行う。今まで翻訳した童話作品の「やまなし」、「鹿踊りのはじまり」、「ひかりの素足」「オツベルと象」の作品の対話部分を「話し言葉」にした。そして、「龍と詩人」、「注文の多い料理店」、「おきなぐさ」、「なめとこ山の熊」と「土神と狐」の作品は対話の内容が大人向けの上品な話と思い、ベルシャ語の書き言葉にした。

3. 宮沢賢治作品の翻訳のむずかしさ

1) 花巻（岩手県）方言

現在まで文教大学で賢治の童話を九つ翻訳した。それは、「注文の多い料理店」、「鹿踊りのはじまり」、「なめとこ山の熊」、「おきなぐさ」、「オツベルと象」、「土神と狐」、「龍と詩人」、「やまなし」、「ひかりの素足」である。どの作品でも岩手県あるいは、花巻市の方言が主人公の対話に使われている。その方言はここ埼玉の出身者（日本語母語話者）に聞いても分からないと言われたことが何度もあった。特に「鹿踊りのはじまり」や「ひかりの素足」には方言がかなり使用されている。

「昨夜、今朝方だたがな、火あ消でらたな、覚だが。」

「お父さん外で稼いでら。さ、起きべ。」

「火あ消でらたもな。おれあ二度起きで燃やした。さあ、口漱げ、飯でげでら、樵夫。」（「ひかりの素足」）

「さあ、息の音あ為ないがけあな。口も無いようだけあな。」

「あたまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがったな。」

「そだらこんだおれ行って見べが。」（「鹿踊りのはじまり」）

実はイランにもいろいろな方言が存在している。たとえば、クルド方言、ギラキ方言、ロリー方言、コラサニ方言、バルチ方言など様々な方言があるが、方言は文章に書かないようにしている。文書になる言葉は99%標準言語である共通のペルシャ語だけである。

このような事情から、私は宮沢賢治のどの作品の方言もペルシャ語標準語（書き言葉、話し言葉）で翻訳するつもりである。

2) 擬音語と擬態語

『広辞苑』によると、擬音語には、「実際の音をまねて言葉とした語。「さらさら」「ざあざあ」「わんわん」など」、さらに、擬態語には、「視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象を言語音で表現した語。「にやにや」「ふらふら」「ゆったり」の類。」という定義が見られる。擬音語と擬態語は日本語でオノマトペやオノマトペアと言うが、英語の onomatopoeia の意味とは違うと言われている。“Longman Dictionary of English” を見てみると、onomatopoeia は、「The use of words that sound like the thing that they are describing, for example “hiss” or “boom”.」という定義がある。この定義に従って考えるなら、英語の onomatopoeia という言葉は日本語の擬音語だけを含んでいる。実際には英語には擬態語に当たる mimetic words という言葉があり、それは、“Longman Dictionary of English” を見てみると、「copying the movements or appearance of someone or something else.」という定義が見られる。つまり、日本語のオノマトペには英語の onomatopoeia と mimetic words の両方が含まれている。

宮沢賢治の作品、特に童話には擬音語や擬態語が多く使われている。間違いなく、擬音語や擬態語は賢治の作品をますますきれいにし、その上、直感的に理解できることがすばらしい。筆者にとって、擬音語や

擬態語を翻訳することは大変困難であり、かつ重要なことと考えている。日本語に擬音語や擬態語が数多く含まれていることはよく知られているが、ペルシャ語にも擬音語や擬態語がそれほど少ないわけではない。確かに、日本語ほどは多くはないと言えるが英語よりは数が多いように思われる。小倉 (2016) ⁽⁸⁾ によると、「日本語のオノマトペは副詞+動詞、英語のオノマトペは様態動詞一語で表現される」と言われている。筆者はJohn Bester ⁽⁹⁾ による、宮沢賢治作品の英語訳を調べたが、ほとんど小倉の指摘する通りであった。ここでは、より明確するためのいくつかの例を挙げる。

「すばるや^{しん}参^{ほし}の星^{みどり}が緑^{だいたい}や橙^{こきゅう}にちらちらして呼吸をするように見えた。」

برج ثور و سه ستاره کمر بند صورت فلکی شکارچی، به رنگهای سبز و نارنجی در آسمان سو سو می زدند، گویی داشتند نفس می کشیدند.

(Borje sur va se setare-e kamarbande surate falaki shekarchi, be ranghaye sabz va narenji dar aseman su su mizadand, gui dashtand nafas mikeshidand.)

The Pleiades and Orion's belt glimmered now green, now orange, as if they were breathing. (John Bester) (1993)

ここでは、ペルシャ語には「ちらちら」と同じ意味の言葉は、「su su」という言葉で、英語では様態後動詞で表現される。

小十郎が谷をばちやばちや^{わた}渉って一つの岩にのぼったら…

کوجورو تا بالای زانو وارد رودخانه میان دره شد و چلپ چلوپ از آن گذشت.
وقتی که به بالای تخته سنگ بزرگی رسید،...

(Kujuro ta balaye zanu varede rudkhane miyane dare shod va chelep cholup az an gozasht. vaghti ke be balaye takhte sange bozorgi resid…)

Kojuro was squelching his way up a valley…

「ばちゃばちゃ」と同じ意味の言葉はペルシャ語で「chelep chelup」というオノマトペがあり、英語の場合は、「squelching」という様態語動詞で表現される。しかし、宮沢賢治の作品には擬態語も多くあり、ペルシャ語には擬態語はそれほどないために、常に工夫が必要である。

「間もなく地面はぐらぐらとゆられ…」

「ばしゃばしゃくらくなり」(「オツベルと象」)

「ぐらぐら」「ばしゃばしゃ」はペルシャ語にはないので、副詞+動詞 به شدت می لرزید (be sheddāt milarzīd) という表現で翻訳し、表した。John Besterの英語訳も調査したら、great shudderとturned durkという訳があった。

さらに、『土神と狐』の作品に書いてある「ちらちらゆれる」の擬態語は、ペルシャ語で副詞+動詞 به آرامی می لرزید (be arami milarzīd) を使い、英語訳では、flutter flutterが使われている。

また、場合によって、日本語の擬態語とペルシャ語での同じ言葉はなくて、その代わりに比喩や例えを使うようにし、工夫する。たとえば、『土神と狐』の作品で表現されている、「かばの木はもうすっかり怖くなって、ぷりぷり… ゆれた」。ペルシャ語では、「ぷりぷりゆれた」は用語の مثل بید می لرزید / Mesle bid milarzīd (柳の木のようにふるえた。))にした。ジョン・ベスターの英語訳では、「quiver and quiver」という

様態動詞になっている。

★

宮沢賢治作品に現れる日本語は豊かであるが、ペルシャ語との文法的な相違、さらには多用される方言や擬音語・擬態語など、日本語としての正しい意味を理解できているか不安な点も多くあった。そのような場合、私を共同研究者として招いてくださった鈴木健司教授と一語一語丹念に話し合い、その検討結果に基づき、ペルシャ語に翻訳した。⁽¹⁰⁾

注

- (1) 文教大学大学院付属言語文化研究所共同研究員 (2017年度)
- (2) 文教大学文学部
- (3) Nahoko Tawaratani (1998) 『日本現代偉大な詩人/Shoaraye Bozorge Moasere Japon』 Toos 出版社
- (4) Behnam Jahedzade 『Bargi Dar Saye』 Tehran, Dibache出版社 2010年
- (5) Asieh Saber Moghaddam 『Mahe Asemane Sobh』 Akhtaran 出版社 2015年
- (6) ペルシア語 (Fārsī, Pārsī) は、イランを中心とする中東地域で話される言語である。ペルシャ語は、ファールシー語やパールシー語ともいう。言語学的にはインド・ヨーロッパ語族ーインド・イラン語派ーイラン語群に分類される。ペルシア語は高度な文明を持っていた古代ペルシア帝国から現在に至るまでイランを中心に使われ続けてきた言語であり、文献によって非常に古くまで系統をさかのぼることができる。使用地域はおもにイラン・アフガニ

スタン・タジキスタン及びウズベキスタン・ロシア・コーカサス地方・バーレーン・イラクの一部でも話される。母語話者は4600万人を超えるとされている。イラン、タジキスタンでは唯一の公用語とされ、アフガニスタンではパシュトー語とともに公用語とされている。ペルシア語は複数中心地言語のひとつであり、イラン、アフガニスタン、タジキスタンでそれぞれ標準語が別個に定められている。

- (7) 現在のペルシア語にはアラビア語からの借用語が非常に多く、その形態は古代ペルシア語とはかなりの断絶がある。
- (8) 小倉 慶郎 (2016) 「日英オノマトペ考察：日英擬音語・擬態語の全体像を概観する」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』第14号 p.23-p.33
- (9) John Bester 『Once and Forever』(1993、KODANSHA・INTERNASTIONAL)
- (10) Asieh Saber Moghaddam (2017) 「イランにおける賢治文学の受容と今後の可能性について」『賢治学』第4輯 岩手大学宮沢賢治センター編 p.187-p.195